



灼熱の砂漠特異点で干からびそうになっていた。
「はあ……はあ……水……もう限界……」
突然、岩陰から荒くれ男たちが現れ、わたしを囲む。
「へへっ、珍しいな。女の旅人だ」
リーダー格の盗賊がニヤリと笑う。
「水をわけてやってもいいぜ？」
しかし貴重な水だからただじゃやれねえな。
お嬢ちゃん、支払えるものはあるかい？」

男が腰を強く押し進め、太い肉棒をぐだ子の最奥まで一気に埋め込んだ瞬間。

「お、お、おとおお……!!!!」

ぐだ子の瞳がトロンと溶け、舌が口の端からだらしなくはみ出した。

その直後、男が容赦なく腰を振り始めた。

ずんっ！ ずんっ！ ずんっ！

子宮口を直接抉るような、深く重いストローク。
熱く太い肉棒が膣壁を擦り上げ、敏感な肉壁を容赦なく抉りながら往復する。

「あっぐううっ……！ んほおとおおっ……♡♡」



頭の中が真っ白に染まる。

思考が溶け、言葉がろれつ回らなくなる。

ただただ、男の太いペニスに貫かれ、

雌として犯されているという事実だけが、彼女を支配した。

(わたし……バカになっちゃう……)

頭、からっぽ……ちんぽ以外、何も考えられない……)

しかし男は止まらない。

ピストンの速度をさらに上げ、ぐだ子の子宮を執拗に突き上げ続ける。

「ひゃんっ♡ おほおっ……！ また……また来るっ……♡」

おんっ！！

二度目の絶頂が、波のように押し寄せてきた。

「んおおおっ♡ おかしくなるうううっ……♡」

あっぐううううっ……♡

ぐだ子の膣内が激しく痙攣し、

熱い愛液が男の肉棒をさらにぬるぬると包み込む。

引るん♡

ドチュッ♡
ドチュッ♡

ドチュッ♡

どちゃっ♡

どちゃっ♡

びんぽ♡

ドチュッ♡

引るん♡

ドチュッ♡

びんぽ♡

ドチュッ♡

おんっ

ドチュッ♡

ピッ

お金は…
▶ ない
▶ あるわけない

じゃ、穴使わせて
もらうわ

おんっ

おんっ

腹の中にもたっぷり
飲ませてやるからなw

おんっ